

## 学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	瀧健太郎
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	都市博甲第2082号
学位授与年月日	2019年3月26日
学位授与の根拠	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	都市イノベーション学府 都市イノベーション専攻
学位論文題目	記憶のヴィークル（乗り物）としてのアート・プロジェクト：クシシュトフ・ヴォディチコのアート戦略
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 室井尚 横浜国立大学 教授 彦江智弘 横浜国立大学 教授 樽沼範久 同志社大学 教授 越前俊也 京都市立芸術大学 教授 加須屋明子

## 論文及び審査結果の要旨

瀧健太郎氏の学位論文は、ポーランド生まれでアメリカ合衆国在住のアーティスト、クシシュトフ・ヴォディチコ（1943年生まれ）の全作品に関する包括的な研究論文である。

ヴォディチコは戦時中のワルシャワで生まれ、1960年代後半から現在に至るまで、さまざまな時代背景、展示環境、多様な地域で芸術活動を行ってきた。

これまでの先行研究はヴォディチコが北米での活動で注目されるようになった1980年代以降の作品を個別に論じたものが多く、初期のポーランド時代から最近作までを全体的な視点から捉える研究はこれまでなかった。

本論文は知られることのなかったポーランド時代の初期作品を、最近開催されたポーランド、ウッチや韓国、ソウルにおける大規模な回顧展とそれに関連した文献から繙き、カナダ移住以降の大規模なプロジェクション作品や、身体に装着するデバイス＝インストルメント型の作品、モニュメント型の作品など多岐にわたる作品群が初期から一貫した問題関心の下に続けられていることを具体的な作品の紹介と検討を通して明らかにしたものであり、現在入手可能なほとんどの文献とヴォディチコ本人の著作、インタビューなどを分析・検討しているばかりではなく近年のヴォディチコ作品を直接現場に見に行き、彼がそこで行おうとしたことをその場で検証している点で優れている。

それとともに、ミシェル・フーコー、ジャック・ランシエール、クレア・ビショップらの理論の光の下にこの作家に特異的な芸術活動と社会との関係を明らかにしており、結論部では、彼の生涯にわたるさまざまな形態の作品を「記憶のヴィークル（乗り物）」という概念で捉えることに成功している。

ヴォディチコの業績は近年故国ポーランドでもきわめて高く評価されるようになってきており、また屋外の大規模なプロジェクション作品は社会介入型アートの先駆的存在でもあり、ますます国際的な注目が集まっているが、本論文はこれまで誰も成しえなかったこのアーティストの生涯にわたる芸術活動を包括的、かつ理論的に捉えることができた労作であると言えるだろう。

以上の点から本審査委員会は全員一致で本論文が学位論文としてふさわしいと結論した。また、iThenticateによる論文剽窃チェックでも何の問題もなかったことを付記しておく。

平成31年1月26日（土）午後2時より横浜国立大学都市イノベーション学府Y-GSCスタジオにおいて公聴会を開催した。公聴会については都市イノベーション学府およびY-GSCスタジオのホームページで告知を行っている。本学からは主査の室井尚、彦江智弘、樽沼範久の三名、また学外から越前俊也氏、加須屋明子氏をお迎えして、数名の聴衆を前にして申請者本人から約15分間の論文要旨説明に続いて、各審査委員から合計約1時間15分

の質疑応答による審査を行った。また同日午後3時40分から4時まで、申請者を退出させ審査委員会を開催した結果、審査委員の総意で学位論文を中心として、これに関連する分野の科目について博士（学術）の学位を得るにふさわしい学力を有すると判定した。また修了に必要な単位はすべて取得済みである。

外国語の能力に関しては留学経験や国際学会での複数回の口頭発表、およびビデオアーティストとしての海外展覧会参加の経験もあり、また論文執筆にあたって数十冊の英語文献を読破しており、英語の語学力に問題はないことを確認している。またクシユトフ・ヴォディチコ氏来日時にはアテンドして通訳を務めた経験もあり、会話能力にも長けている。

直接学位論文に関わるものとして、以下の二本の論文（投稿中含む）が挙げられる。

1. 「ヒロシマ・フクシマ：現れの間としての〈顔〉 日本におけるクシユトフ・ヴォディチコの受容」、瀧健太郎、横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院『常盤台人間文化論叢』、第5号、査読有、pp. 43-63、2019年。

2. 「〈モニュメント〉という記述方法 クシユトフ・ヴォディチコのアート・プロジェクト研究」、瀧健太郎、日本記号学会「叢書セミオトポス」投稿中、査読有、2019年。

以上により最終試験は合格（A）であると判定した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。